

新宿区 UD まちづくり ニュースレター

Vol.
16
SPRING

第16号
2025.3

UDスポット とうきょういかだいがくびょういん 東京医科大学病院

令和元年7月に新病院棟が開院した東京医科大学病院は、全国88施設※1しかない特定機能病院※2であり、年間の延べ患者数は約100万人です。建物内は洗練された白色に統一され、温かみのある照明や丸みを帯びたデザイン、オリジナルのホスピタルピクト等により、患者さんの不安を取り除かれるような空間が広がっています。また、低層階は病院と周辺の街並みを結んでおり、夜になると建物からはあたたかい色の光があふれ、街に優しさや安心感を届けています。

ニュース第16号では、これまでにない大規模病院を目指し、「都市との繋がり」「患者ファースト」「医療従事者の健康」を追求した東京医科大学病院のユニバーサルデザインを一緒に探していきます。

ユニバーサルデザイン

UDとは？

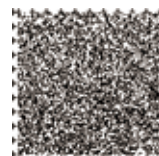
年齢・性別・国籍・個人の能力等にかかわらず、できるだけ多くの人々が利用できるよう生活環境その他の環境をつくり上げていく考えです。

新宿区には、多くの外国人をはじめ、様々な人々が生活しています。区では、移動しやすく、利用しやすく、わかりやすいまちを目指して、令和2年3月にUDまちづくり条例を制定しました。

このニュースレターでは、新宿区の実践や、UDスポットの紹介、利用者の方などをお伝えしていきます。

※1 令和7年1月1日時点

※2 高度の医療の提供、高度の医療技術の開発及び高度の医療に関する研修を実施する能力等を備えた病院です。



Uni-Voice
写真提供：後藤晃人

UD

探検隊が行く！新宿UDまちづくりスポット

入口から受付・待合まで
直感的にわかりやすく導く光

角のない柔らかなデザイン

写真提供：千葉顕弥

自然光のような光が
気持ちを明るくしてくれる

写真提供：千葉顕弥

Good 点
UD
ポイント

あたたかい光で人々を導く照明

病院内の照明はデザインや明るさ、色合い（色温度）などの組合せによって、それぞれの場所に最適な照明計画となっています。色覚障害のある方や白内障の方などにとって、光は色のコントラストよりも判別が付きやすいため、より多くの人にとってわかりやすい誘導をすることができます。



オリジナルの
ホスピタルピクト

写真提供：千葉顕弥

見やすい大きさと
色の表示で
診察室まで迷わない



トイレのピクト
グラムは見慣れた
JIS規格のもの

外来待合の様子



通常の見え方



白内障の方の見え方イメージ

写真提供：株式会社大林組

Good 点
UD
ポイント

行き先が一目でわかる優しいサイン

白色に統一された建物内で識別しやすいよう、サインの文字とピクトグラムは墨色とし、ポイントカラーとしてスクールカラーのえんじ色、藍色を配色しています。また、オリジナルのホスピタルピクト^{※3}は、各部屋でどのような医療行為が行われるのかを視覚的に分かりやすく、優しく伝達しています。

※3 医療従事者と患者さんの向き合う姿をモチーフに製作したアイコンです。

運営者コメント

風を感じながら
緑に癒される



子どもや車いすの方
でも直接触れられる
みどりの立上がり

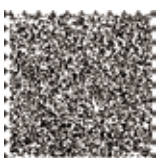
病院だけでなく、その周囲も整備したことで、地下鉄の出入口に近くなり、病院までの道のりは広々として歩きやすくなりました。ひさしもあるので、雨の日でも便利です。新しい建物について、患者さんからは「白くて清潔で良い」という声もいただいています。

現在は多くの患者さんのニーズを満たせていると考えていますが、今後は、スタッフの働きやすさという観点から、LGBTQに関する課題についても取り組んでいきたいです。

（東京医科大学病院 施設課
課長 李直樹さん）



広々として段差が
無いフラットな
空間



Uni-Voice

Good 点
UD
ポイント

だれでも自由にリラックスできる屋上庭園

コンビニやレストランが面するホワイトエ（ラウンジ）からスムーズに出入りできる自動ドアを進むと、入院中の方や病院を訪れた方が外の空気を吸ってほっと一息つける、緑豊かな屋上庭園が広がっています。訪れた人は都市空間の中で自然を感じながらリラックスすることができます。

窓からあたたかい光があふれ出し、
行き交う人に安心感をもたらす

街に癒しを還元
する豊かな緑

広くて歩きやすい
歩道状空地

Good
UD
ポイント

とし びょういん とうきょう とうし びょういん とうきょう とうし びょういん とうきょう 都市と病院をつなぐ空間

青梅街道側と新宿区道2号線側に幅5m以上の歩道状空地と自主管理広場が整備されたことにより、建物周辺の歩行者や病院の利用者が歩きやすい空間になりました。また、植栽があることで街に賑わいや癒しが生まれています。

写真提供：千葉顕弥

設計者インタビュー

2016年に創立100周年を迎えた東京医科大学病院は、「患者とともにある医療」を基本コンセプトとして新病院建替え計画をスタートさせ、2019年7月に新病院を開院しました。最先端の建築・設備による病院機能の整備に加え、『病院建築が本来あるべき姿』を追求し、“都市と繋がりのある病院”“患者ファーストの病院”“医療従事者が健康に働く病院”を病院スタッフ・設計・現場が三位一体となってつくりました。

“都市と繋がりのある病院”としては、**病院周囲に5m以上の歩道状空地や高木を植えた自主管理広場を整備したことで、病院から街へ賑わい・癒しを還元し、歩きやすい歩行空間を実現しました。**また、病棟の低層部の高さが高層部の壁面ラインを周囲の建物と揃えることで、一体感のある街並みを形成しています。

“患者ファーストの病院”“医療従事者が健康に働く病院”としては、窓のない室内環境の改善に取り組みました。病院内の約8割の部屋に窓がないため、患者さんの不安を和らげ、医療従事者が健康的に働けるよう、温かみのある照明を採用しており、光源が直接見えない設計にすることで、柔らかな印象を与え目にも優しい環境を実現しました。それぞれの場所の用途によって明るさや色合い（色温度）などを細かく調整し、機能的に最適な照明を実現しています。また、**建物内の各所では、照明が柔らかな線を描き、患者さんを自然に誘導しています。文字だけでなく光も活用することで、高齢者や障がい者にもわかりやすい案内となっています。**一方、サインについては、医療行為を視覚的にわかりやすく示したホスピタルピクトを製作したり、**視覚障がい者にもわかりやすい大きさ・色合いのサインを計画しました。特に眼科においては目が見えづらい方が多く訪れるため、サインのサイズや文字のコントラストをより大きくするなどの工夫をしています。**

病院内の設備を検討するにあたっては、実際の使いやすさを確認するため、実物大のモデルルームをつかって、数百名の病院スタッフの協力を得ながら設備の快適性や機能性、安全性を確認しました。常に患者さんと向き合い続けている看護師や医師等の意見を取り入れ、患者さん目線で安心・安全な病院、医療従事者が使いやすい病院づくりに取り組みました。全員の意見を一致させることは難しいため、様々な意見を聞きながら確認・改良を繰り返し、より多くの人にとって使いやすい病院を目指しました。



株式会社 大林組
設計本部 建築設計部
堀口さん



株式会社 大林組
設計本部 設備設計部
古澤さん



写真提供：千葉顕弥

下地と文字のコントラスト
が大きい眼科外来のサイン



写真提供：株式会社大林組

安全を考えた
洗面まわりの検討



写真提供：株式会社大林組

看護師による設備の使いやすさの確認



Uni-Voice



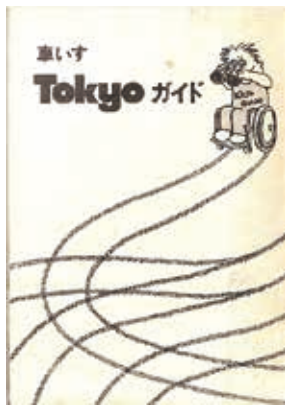
歴史から学ぶ その4 「日本初の バリアフリーマップ」



日本女子大学 建築デザイン学部
建築デザイン学科 助教
(一級建築士・福祉住環境
コーディネーター 1級)
植田瑞昌さん

「バリアフリー」という言葉とその意味は、広く認知されるようになり、多くの自治体や施設で「バリアフリーマップ」が作成されています。では、日本で最初に「バリアフリーマップ」が登場したのは、どのようなきっかけだったのでしょうか。

1973年、車いす使用者であった大須賀郁夫氏を中心に、車いす使用者が利用したことのある建築物の情報を交換する取り組みが始まりました。集められた情報をもとに調査を行い、車いすで利用できる建築物としてとりまとめられ「車いすTOXOガイド」(写真)が誕生しました。これが、日本初のバリアフリーマップと言われています。



大須賀郁夫、吉田紗栄子ほか
「車いす Tokyo ガイド」
の表紙, 1973.7

調査は、玄関の段差がないことや傾斜路の有無、出入り口の開口幅が80cm以上あるか、車いす用トイレの有無など、国際シンボルマーク揭示の条件を基に行われました。障害当事者がボランティアとともに情報を集め、都内117か所を調査しました。その結果、「いちおう車いすで利用できる最低条件を満たしているところ」「車いす用トイレを除いては最低条件を満たしているところ」「なかなか利用できないことはないが、いくつかの点を改造しなければならぬところ」の3段階で評価したところ、ほとんどが3番目の評価となり、国際シンボルマーク揭示条件を満たす建築物はわずか10か所ありませんでした。このガイドブックは、161ページからなり、1ページに1施設(建物)の案内や情報が掲載され、巻末には改善のポイントも記されています。

50年以上が経過し、「バリアフリーマップ」は技術の進化とともに、アプリやWebサイトから事前に外出先の情報を得ることが可能となりました。これにより、障害のある方々や子ども連れの家族などの外出をサポートしています。例えば、新宿区では「新宿らくらくバリアフリーマップ」というサイト(注)があり、区内の公共施設や商業施設、公園等のバリアフリー情報を提供しています。

現在では一定規模の建築物等はあらかじめバリアがないように計画されています。しかし、小規模建築物や既存建築物では、まだ利用が難しい場所があるのも現実です。

バリアフリーマップがなくとも誰もが好きな時に好きな場所に安心して出かけられるようになるとよいですね。



(注1) 新宿らくらくバリアフリーマップ

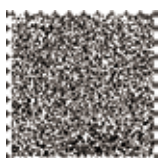
(今回のコラムはUDに詳しい専門家の方からご寄稿いただきました。)

新宿区からのお知らせ

第6回新宿区ユニバーサルデザインまちづくり審議会で 学校法人東京医科大学共同ビル(仮称)が報告されています。

東京医科大学西新宿キャンパス再開発整備において、今回ご紹介した東京医科大学病院のほか、教学施設、法人本部・事務局、職員宿舎、保育園等が入居する学校法人東京医科大学共同ビル(仮称)の増築が計画されています。本計画は令和4年12月15日、第6回新宿区ユニバーサルデザインまちづくり審議会で報告されています。詳しくは2次元バーコードよりご確認ください。

審議会の
詳細はこちら



Uni-Voice

新宿区ユニバーサルデザインまちづくりニュースレター 第16号 (令和7年3月発行)

お問い合わせ先: 新宿区景観・まちづくり課